『彼岸過迄』論

――苦悩の果てに立ち現われてくるもの――

佐藤裕子

一

『彼岸過迄』論の趨勢を見る時、必ずといっていい程取り上げられるのが、その異例の緒言において漱石自らが語った「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組」まれた短篇連鎖という形式と、「結末」において「彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聽く一種の探訪に過ぎなかつた。」と語られる敬太郎の担う役割についてであることは、興味深いものがある。

そしてそのいずれもが、まず漱石のこの新しい試みが十分に達成できなかったという見通しに立った上で、作品制作上の「本来の意図と実際のずれ」[1]を指摘するものであることは言うまでもない。

例えば小宮豊隆は、「須永の話」に至って「初めて本筋に這入つた」感があるとした上で、前半四章「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」を「内面的な構成の上からは」「餘計なものであると、言ふことができなくもない」[2]と作品構成の破綻を論じるのであるが、この時提示された二つの問題、すなわち作品を「一長篇」として見ることが

できるかどうかという問題と、作品の主題をどこに見い出すのか、「長篇としての一貫した主題」[3]が果して存在するのかという問題が現在に至るまで持ちこされていることは、周知のところであろう。

漱石の作品において主題の分裂、構成の破綻が問われているのは『彼岸過迄』に限ったことではないにしても、『門』の参禅をめぐって指摘されてきた構成の破綻や、五ヶ月の中断をはさんで再開された『行人』の「塵労」の章をめぐって問われてきた作品の分裂等の問題と、ここで言う構成の破綻とは全く別のものであることは十分留意されねばならない。分裂、あるいは破綻とはある一つの流れが存在するということを前提としての言葉である。しかし、『彼岸過迄』において語られたのは、ひとり須永の苦悩だけではあるまい。少なくとも三つのことが、松本と千代子と須永の三人の人間の上にすでに起こっているのだ。

短篇の一つ一つが、それぞれ見事な完結性を保ちつつも一つではなお不充分で、それぞれがそれぞれの短篇にとってなくてはならない欠くべからざる状態にあり、それが『彼岸過迄』の世界を形づくるというのが、漱石の目指したものではなかったか。たとえその意図が十分に果されず、「離れるとも即くとも片の付かない」ものであったにせよ、少なくとも『行人』の一郎の苦悩や、『こゝろ』の先生の自決へと、作品の主題が一点へと収斂してゆくものとは無縁の世界を形成することこそ、[4]作家漱石の意図と、選びとった方法であったはずである。

繰り返すが、『彼岸過迄』においては、三つの出来事がすでに起こってしまっている。そして、敬太郎はそのことを知らずに、松本と出会い、千代子と出会っているのだ。[5]市蔵についても事情は同様で、大学時代からの友人であったにもかかわらず、敬太郎は須永の過去や、現に進行しつつあった出来事を知らずに、同じ時を過していたのである。[6]

つまり『彼岸過迄』とは、田川敬太郎という大学を出たばかりの青年が、〃すでに起こってしまったこと〃を過去に持つ三人の人間と、それを知らずして出会い、人間が生きるということのわかりがたさと、それぞれの苦しみ、哀しみを垣間見るという物語なのだ。

この作品の構成は『こゝろ』のそれと酷似している。その違いを挙げるとするならば、敬太郎が三人の人物と出会ったのに対して、『こゝろ』の「私」が出会うのは先生ただ一人であったことと、『こゝろ』がその冒頭からただ一人遺書を残された「私」という青年の回想の物語であったことの二点であろう。『彼岸過迄』において回想形式をとるのは、作品後半部「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」の三つの短篇である。『こゝろ』のその冒頭「私は其人を常に先生と呼んでゐた」と語り始める「私」は、先生の「〃やってしまった〃行為」[7]と、そのことについて考え続けた先生の生涯の意味を知っているが、『彼岸過迄』の敬太郎は、「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」で語られる過去の三つの出来事を知らずに、その当事者たちと出会ってゆくのである。敬太郎がそのことの意味について考えたことが記されるのは、「結末」を待たねばならない。

いずれにしても『こゝろ』において、「私」が先生と過した時間を描く上「先生と私」、中「両親と私」の章と、先生の過去の事実を描いた下「先生と遺書」の章とがはっきりと区別されていたように、それに先立って書かれた『彼岸過迄』においても、敬太郎が須永や千代子、松本と過ごす小説的現在を描く前半三つの短篇と、過去の出来事を回想する後半三つの短篇とが明らかに区別されていることには、充分留意しなければならないだろう。

少なくとも、高木文雄氏の御指摘の如く、「松本の話」で語られた「改良」されたはずの「市蔵の状態は、長続き」[8]せず、作品冒頭、小説的現在を共に過ごす敬太郎の眼に映る市蔵の姿は、以前と少しも変らぬ、否、前にも増して「益偏窟に傾く」市蔵でなければならないのだ。

これは秋山公男氏の指摘する漱石の時間意識の「錯誤」[9]ではない。「作品の末尾から冒頭へと持続させること」[10]こそ、漱石の意図した作品の構成であり、またそうでなければ描けない一つの世界があったはずである。

では、その世界とは何か。

註

(1) 上出恵子「夏目漱石『彼岸過迄』序論」「活水論文集」25号・一九八二年三月
(2) 小宮豊隆『夏目漱石』三・岩波書店・一九五三年十月五日
(3) 小倉脩三『夏目漱石ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』・有精堂・一九八九年二月
(4) 藤尾健剛「『彼岸過迄』――漱石と門下生――」「日本近代文学」第46集・日本近代文学会一九九二年五月十五日
氏はこの分裂に関して「作品自体の要求する必然であったとすればどうであろうか」と述べておられる。
(5) 玉井敬之『夏目漱石論』桜楓社・一九七六年十月
敬太郎が三人と出会ってゆくことについて次のように述べておられる。
「しかし敬太郎の前にあらわれたときのその人たちの表情は、戯曲のなかに生き、ある役割を演じて来た人間の顔ではない。しかしその平凡尋常な表情の奥には性格と精神に癒しがたい傷痕を残しつつ、複雑な心情を形成して、ここに生きているのである。」
(6) 「停留所」四において、須永の家を訪れた敬太郎が次のように考える場面がある。
「須永の話を段々聞いてゐるうちに敬太郎は斯ういふ實地小説のはびこる中に年來住み慣れて來た須永も亦人の見ないやうな芝居をこつそり遣つて、口を拭つて濟ましてゐるのかも知れないといふ氣が強くなつて來た。」これは敬太郎が須永の家に入つていく千代子の後姿を見た後での考えであるが「序に君の分も聞かうぢやないか」と問う敬太郎に市蔵は「今日は咽喉が痛いから」とだけ答えている。確かにこの時市蔵は「人の見ないやうな芝居」をやった後だったのである。
(7) 柄谷行人「歴史と自然―鷗外の歴史小説」・「新潮」一九七四年三月
(8) 高木文雄「須永市蔵」「国文學」昭和四十三年二月
(9) 秋山公男「『彼岸過迄』試論―「松本の話」の機能と時間構造―」『国語と国文学』昭和五十六年二月
(10) 酒井英行『漱石　その陰翳』有精堂・一九九〇年四月

二

そして今一つ問題となるのが、敬太郎がどこまで深く作品に関与しうるのかという問いである。

確かに敬太郎は七つの短篇のすべてに姿を現わしているにもかかわらず、その担う役割について、「数珠の紐の結び目」[1]あるいは、「狂言廻しのような役」[2]というように、漱石が「遂に其中に這入つて、何事も演じ得ない門外漢に似てゐた」と「結末」において念を押したそれ以上のものではないように思えるからだ。

物語は、大学を卒業したばかりの「平凡を忌む浪漫趣味の青年」（「風呂の後」四）田川敬太郎が同じ下宿の「非凡の経験に富んだ平凡人」（「風呂の後」五）としか評しようのない森本の「世の中には大風に限らず随分面白い事が沢山ある」（「風呂の後」九）という言葉に導かれるようにして、友人須永市蔵とその二人の叔父、田口要作と松本恒三の三家族の「戸毎に演ぜられてゐる」「社會の上層に浮き上らない戯曲」（「停留所」四）を「探訪」するという結構をとる。

「尋常以上に奇なあるもの」（「風呂の後」五）に対する敬太郎の無邪気な好奇心は、例えば「風呂の後」の章において、森本の妖怪談を「相當の興味と緊張」（同三）をもって聞くくだりや、「田川の蛸狩」（同四）、「新嘉坡の護謨林栽培」（同）などのエピソードによって、何度か繰り返されるのであるが、その一方において漱石は単に「浪漫趣味」（「風呂の後」四）とか「剽軽もの」（同）という敬太郎に冠せられた言葉から想起されるイメージとは別の敬太郎の姿をも描いているのである。

例えばそれは、下宿の主人が森本の失踪に関連して、敬太郎をあたかも共犯者のように見なした時に見せた敬太郎のプライドや、あれほど「浪漫的探険」（「停留所」四）にあこがれていながら、田口要作から本当に「探偵」を依頼された時「人の狗に使はれる不名譽と不德義」（同二十一）を感じる青年でもあるからだ。

しかもそればかりではない。漱石は敬太郎を、松本と千代子を「探偵」している時に、「こんな落ち付いた空の下にゐる自分が、何故こんな落ち付かない眞似を好んで遣るのだろう」[3]（同三十五）と、自分のやっている行為の意味を充分に吟味し、疑問を抱くことのできる青年としても描いているのである。

少なくとも、様々な体験を経た後に、つまり成長のその結果として現実を認識する力をつけたというのでは決してない。初めから、無邪気さと共に深い洞察力をあわせ持つ青年として描かれているのだ。

「風呂の後」「停留所」「報告」の章においてしばしば繰り返される敬太郎の目に映るアイロニイ(4)の表現も、あながら辻待の馬車」に「一種のロマンスを見出す」(「風呂の後」五)という何事につけ「何處か尋常と變つた新しい調子」(同)を見つけたいと願う彼の嗜好によるものだけではあるまい。一つの現象に、相反する二つの可能性を見い出しているということなのだ。この無邪気な好奇心と同時に存在する敬太郎の深さの故に次の言葉が出てくるのであろう。

「――斯ういふと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に會つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手數が省けて、さうして動かない確かな所が分りやしないかと思ふのです」(「報告」六)

「報告」の章で、「要領を得ない」探偵の結果を田口に報告する際に敬太郎が田口から笑われることを予想しての言葉であるが、この言葉によって田口は敬太郎を初めて信頼し(5)、松本恒三を紹介するのである。

このようにして敬太郎は、三人の人間の物語を聞き手となってゆく。

註

(1) 小宮豊隆『漱石の藝術』岩波書店・一九四二年十二月

(2) 伊藤整『近代文学鑑賞講座』第五巻・夏目漱石、角川書店・昭和三十三年八月一日

(3) 山田有策「『彼岸過迄』敬太郎をめぐって」「別冊国文学夏目漱石必携Ⅱ」・一九八二年五月
氏はこの敬太郎の考えたことを「覚醒」とされた上で、敬太郎の成長を述べておられる。

(4) 敬太郎が考える〝アイロニイ〟の表現には次のようなものがある。
「こんな時に、非凡の經驗に富んだ平凡人とでも評しなければ……」(「風呂の後」五)
「敬太郎は森本の此言葉を、失意のやうにも又得意のやうにも聞いた。」(同九)

「さうして依然として出來るやうな又出來ないやうな地位を、元程焦燥らない程度ながらも、先づ自分の遣るべき第一の義務として、根氣に狩り歩るいてゐた。」(同十一)

「此黑人だか素人だか分らない女と、私生兒だか普通の子だか怪しい赤ん坊と……」(同)

「青年があんなでは駄目だと考へたり、又あんなにも爲つて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾から出來上つた斑な興味を懷に、彼は須永を訪問したのである。」(「停留所」二)

「――何物かを呑まうとして呑まず、吐かうとして吐かず……」(同六)

「そこで離れてゐて合ひ、合つてゐて離れる樣な日向日蔭の裏表を一枚にした頭を彼は田口家に對して抱いてゐたのである。」(同九)

「――「あんな顏はして居りますが、見懸によらない實意のある剽輕者で御座いますから」と云つて一人で笑つた。」(同十二)

「あれで出來るとも出來ないとも、まだ方のつかない未來を中途半端に仕切つてしまつた。」(同十四)

「――易者が何んな希望と不安と畏怖と自信とを與へるだらうといふ好奇心に惹かされて……」(同十五)

「此怪しげに見えて平凡な、しかも無暗に輕い竹の棒が……」(同二十四)

「彼は其位興を覺ましながらまだ其位寢惚けた心持を失はずに立つてゐたが、やがて早く下宿へ歸つて正氣の人間に爲らうといふ覺悟をした。」(同二十八)

「其時敬太郎の頭に、此女は處女だらうか細君だらうかといふ疑が起つた。」(同二十九)

「――何にも考へずに何か考へ込んでゐると云ふ風であつた。」「同三十六)

「昨日の出來事は凡て本當の樣でもあつた。又纏まりのない夢の樣でもあつた。もつと綿密に形容すれば、「本當の夢」の樣でもあつた。」(「報告」一)

「――彼は正氣でありながら、何かに魅入られたのではなからうかと云ふ疑さへ起した。」(同一)

「昨日の男も女も彼の眼には繪を見る程明らかであつた。／夫でゐて二人とも遠くの國にゐる樣な心持がした。遠くの國にゐながら、つい近くにあるものを見るやうに、鮮やかな色と形を備へて眸を侵して來た。」(同一)

「從つて洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ゐないのかも判然しなかつた。」(同一)

「彼は物足らない意味で蛇の頭を呪ひ、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。」(「結末」)

その他にも森本、田口、松本、また作者自身の語るアイロニイの表現がいくつか見られる。作品後半部に進むに従つて、アイロニイの表現が、表面的なものから次第に深められ、より一層心的なものとなつていることは見逃がせない。

(5) 信頼という点では市蔵も松本も敬太郎を信頼したからこそ、それぞれの物語を敬太郎に聞かせるのだ。市蔵は次のような場面の後、敬太郎に自らの物語を語り始める。

「――敬太郎は仕方なしに「江戸つ子は無愛嬌なものだね」と云つて笑ひ出した。須永も突然可笑しくなつたと見えて笑ひ出した。夫から後は二人の氣分と同じ様に、二人の會話も圓滿に進行した。／斯ういふ打ち解けた心持で、二人が差し向いに互の眼の奥を見透して恥づかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、其眞相を聞かうとする敬太郎に取つて偶然の仕合せであつた。」（「須永の話」二）

また、松本は次のように念を押した上で市蔵の秘密を語るのだ。

「是は單に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有たない話だから、君が市藏のために折角心配して吳れた親切に對する前からの行掛さへなければ、打ち明けない筈だつたが、實を云ふと、市藏の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。」（「松本の話」五）この点に関して、遠藤祐氏より貴重な御教示をいただいた。深く感謝申し上げます。

三

では何故、敬太郎が「聞き手」とならなければならなかったのか。

それはつまり、「雨の降る日」の中で千代子が語る松本の姿と、「須永の話」の中で市蔵が語る千代子の姿と、「松本の話」の中で松本が語る市蔵の姿と、敬太郎が実際出会い、知っているはずの彼らの姿とが異なることこそが必要であったからだ。

そして、敬太郎が初めに抱いていた三人の人物に対する予想、評価がことごとく崩れ、穏かで愉快な日常も真実であり、その日常を突然破って顔をのぞかせる苦痛、悲哀もまた真実であるという「生きる」ということの実相を、漱石は徹底した現実凝視の中で描いてゆくのである。

この時敬太郎はまさに、酒井英行氏[1]の指摘されるように、「彼の存在は「雨の降る日」以後、人間存在の「アイロニー」性を照らし出す鏡としていっそう意味を持ってくる」のである。しかもその時、彼らの苦悩に対して、敬太郎が「聞き手」以上のものであってはならないし、また決してそれ以上のものとはなり得ず、それぞれの「劇」が「是からも先何う永久に流轉して行くだろうか」(「結末」)を見届けることが、敬太郎に担わされた役割であることを、漱石は「結末」の章を付することによって確めているのだ。

このようにして、敬太郎と我々読者の前に「過去」にすでに起こってしまった三つの出来事が開示されてゆく。「雨の降る日」の章では、「たゞ不思議といふより外に」(「雨の降る日」四)ないような松本の五女宵子の突然の死が語られ、「須永の話」では、千代子の縁談の話に端を発して、「君は貰ふ氣はないのかい」(「須永の話」二)という敬太郎の問いに答える形で、市蔵と千代子の出生時にまで逆のぼりつつ、「大学三年から四年に移る夏休み」(同十三)の鎌倉での市蔵、千代子、高木の三人の葛藤の顚末が語られる。

「松本の話」では、前章「須永の話」において、市蔵自身の口から敬太郎にほのめかしていたように、市蔵母子が血のつながった親子ではないことが明らかにされた上で、なお市蔵が悩みつづけていることが語られるのである。

しかも、そういう葛藤の後も、千代子は須永の家を訪れ、敬太郎を含めて三人で実に屈託のない時を過しているし、「雨の降る日」の顚末も、そういう一時の中で語られている。

また、市蔵の母は慈み深く、敬太郎を相手に、「伜の話をする」(「停留所」十)のが「唯一の樂しみのやう」(同)にして、母一人子一人の生活を実に楽しげに語っているし、市蔵もまた、自らの出生に関して一点の疑惑があったにせよ、母に対して遠慮なく我儘を言い、「松本の話」を聞いた後も、月に一度ずつ、「蠣殻町の水天宮様と深川の不動様へ御參り」(「停留所」五)に出かけ、時には「御母さん」も「年を取つた所爲かしら」(同十)などと悪態をつきながらも母に代わって寺参りをする本当に仲の良い親子なのである。しかもそればかりではなく、市蔵の母は息子が

何に悩んでいるかその原因は分らないまでも、息子が何かに苦しんでいることには気づき、同じように気をもみながら、卒業試験を終えて突然関西へ旅行に出かけると言い出した市蔵を案じて、秘かに松本に相談に出かける母でもある。

松本にしても事情は同様で、敬太郎がとまどうのは松本が雨の降る日に面会を謝絶したという一点に尽きるのであって、その点を除けば松本が何者であるかを知る前も、知った後も「決して愛嬌のある方」（「報告」九）ではないが、「何処かおつとり」（同）とした、「尋常以上に品格のある紳士」（「停留所」三十二）であることには変わりはないのである。

では何故松本が雨の降る日に面会を謝絶したのか。この、緒言と「結末」を除けば最も短い「雨の降る日」において、千代子が語ったのは一人の幼い子供の死であった。しかも医者が「ただ不思議といふより外に言ひ様がない」と首をかしげるような、あまりにもあっけない突然の死なのである。

この「死」に関する伝記的事実として、明治四十三年八月二十四日の「修善寺の大患」での自らの人事不省の三十分間の死と並んで、明治四十四年十一月二十九日に漱石を襲った五女ひな子の急死という事件を見落す訳にはいかないのであるが、この物語が十一月二十九日から十二月八日までの漱石の日記や断片に克明に記されたその死から葬儀・骨上げまでの様子をほぼ再現していることは周知のところであろう。

越智治雄氏[2]は、この「死を見た衝撃」に関して、

それは人の想像するほど劇的でもなんでもない。だからこそ、死は恒常的であり、われわれのうつろいやすい日々の背後に常に潜んでいる。

と述べられるのであるが、日常の中に突然姿を現わす非日常的な出来事と、しかもそのことを憤ったり、悲しんだりすることさえも虚しいものとなるような、存在そのものがゆらぎ出すようなそのような感覚を漱石は描いてゆくので

ある。

そして漱石は、松本の長女咲子が一人で便所(はばかり)へ行くのを怖がったり、妻のお仙が他の子供達に着せる式服の心配をしたり、焼香の時に次女の重子が手順を間違えたのを見て吹き出したり、骨上げに行く途中の車上から見た景色を丹念になぞったり、火葬場の裏の空地の孟宗竹が見事に茂っていることなどを、千代子の眼を通して、およそ「宵子の死」そのものと直接関係のないことを迂遠なまでに、余すところなく描き尽してゆく。

そして「己は雨の降る日に紹介状を持つて会ひに來る男が厭になつた」(「雨の降る日」八)という松本の言葉である。そもそも、宵子の突然の死と、雨の降る日に紹介状を持って訪ねてきた男と、何の関わりも因果関係も無いはずであるのに、それを愚しいことを知りつつも、尚関連づけざるを得ない傷ついた魂の痛みがそこにある。

「雨の降る日」で語られた宵子の死が、病因のはっきりとした、確たる原因があっての死としては描かれてはいなかったように、(3)「松本の話」の中心を成す市蔵の出生にまつわる出来事も、なんとも手のほどこしようのない、本人の手の届かぬところで定められているという点で共通している。(4)また「須永の話」で語られる千代子との顚末にしても、市蔵の中に父の死の前後から芽ばえた、自分は母の実の子なのだろうかという疑惑と、母が何故それほどまでに千代子との結婚にこだわるのかという疑惑とが微妙にからみ合うことで、ますます市蔵を頑にさせ、「内へとぐろを捲き」こませる結果となっている点で、(5)余人の手ではいかんともしがたい状態となっているのであろう。

市蔵が、叔父の松本が千代子・百代子姉妹につけた渾名の話から発展して、敬太郎に、

千代子の言語なり擧動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に藏しているからではなくつて、餘り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだと僕は固く信じて疑がはないのである。

(「須永の話」十一)

と語る時、市蔵は千代子を理解するという点にかけては、他の誰よりも深く千代子を理解しているといえるだろう。

またしばしば指摘されてきた千代子の幼さ[6]や、心にもない発言[7]を市蔵はうけとめているし、時として市蔵に向けて発せられた批難をも含めてその千代子の言動の裏にある真意を、「行き届いた神経[8]」と「優しさ」で見抜いてもいるのである。

千代子もまた、市蔵の考えていることが手にとるように分っている。

「貴方は卑怯です、徳義的に卑怯です。妾が叔母さんと貴方を鎌倉へ招待した料簡さへ貴方は既に疑つて居らつしやる。それが既に卑怯です。が、それは問題じやありません。貴方は他の招待に應じて置きながら、何故平生の様に愉快にして下さる事が出來ないんです。」(「須永の話」三十五)

と言い放つ時、高木という見知らぬ青年がいることで、市蔵が自分と自分の母を招待したその真意を疑り、頑になることは千代子には充分すぎる程分っている。しかも千代子はそれに気づかぬふりをしてその市蔵の「我儘」を許してきたのだ。その千代子の怒りが決定的となるのは、市蔵が自分で自分の「我儘」と「卑怯」に気づきつつも、尚それを自分に許している点である。

市蔵が、自分と千代子とを評して「恐ろしい事を知らない女」「恐ろしい事丈知つた男」(「須永の話」十二)と語る時、この殆んど同質に出来上った二人の人間が、互いに決して譲ることが出来ない事は、おそらくただ一つ「愛する」という行為においてであるのだ。

松本が二人を「離れる爲に合ひ、合ふ爲に離れると言つた風の氣の毒な一對を形づくつて」(「松本の話」一)おり、二人の衝突を「二人の持つて生れた、因果」(同)という時、まさに「二人の運命は唯成行に任せて、自然の手で直接に発展させ」(同一)る以外にないという言葉が、人間の手ではいかんともしがたいという点で、痛切な意味を持ってくるのだ。

註

(1) 酒井英行『漱石　その陰翳』、有精堂・一九九〇年四月

(2) 越智治雄『漱石私論』、角川書店・昭和四十六年六月

(3) 宵子の死について、その原因を漱石は次のように描いている。

「何うも不思議です。たゞ不思議といふより外に云ひ様がないやうです。」(「雨の降る日」四)

(4) 須永の出生にまつわる出来事については、次のような表現である。

「――實を云ふと、市藏の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。」(「松本の話」五) 生れた日からだけでなく、生まれる前から、市蔵の意志とは全く関わりのないところで市蔵の運命が決められていたということであろう。

(5) 市蔵と千代子の衝突について松本は「因果」「宿命」「運命」という言葉を用いながら次のように説明する。

「從つて夫婦にならうが、友達として暮らさうが、あの衝突丈は到底免かれる事の出來ない、まあ二人の持つて生れた、因果と見るより外に仕方がなからう。所が不幸にも二人は或る意味で密接に引き付けられてゐる。しかも其引き付けられ方が又傍のものに何うする權威もない宿命の力で支配されてゐるんだから恐ろしい。／だから二人の運命は、唯成行に任せて、自然の手で直接に發展させて貰ふのが一番上策だと思ふ。」(「松本の話」一)

(6) 高木文雄氏が指摘されるように宵子に食事をさせる場面でかゆを一匙ずつ口に入れてやる度に芸を強いる所は、やはり幼いとかしか言いようがないのであるが、千代子の年の若さや、子供を持ったことがないことを考えると、千代子にとっては宵子は「生きた着せかえ人形」的存在となったとしても、仕方がないと読みたい。

(7) 安藤久美子氏は「雨の降る日」の最後、「叔母さん又奮發して、宵子さんと瓜二つの様な子供を拵えて頂戴。可愛がつて上げるから」という言葉を「その最たるもの」(『彼岸過迄』「解釈と鑑賞」55巻9号・一九九〇年九月) であるとされている。やはり子供を亡くしたばかりの母親にとっては、たとえどんなに親しい間柄であったとしても心ない言葉であることに変わりはない。市蔵も同じ食卓についている。

(8) 高木文雄「須永市蔵」「国文學」昭和四十三年二月

四

「松本の話」の発端は、鎌倉での事件の後「須永の話」最終章で語られた市蔵と千代子の衝突の後も二人の仲が相変らずであることを、松本が敬太郎に語り出すところから始まっている。

松本は市蔵の性格とその苦悩について、次のように語る。

市蔵といふ男は世の中と接觸する度に内へとぐろを卷き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何處迄喰ひ込んで行つても際限を知らない同じ作用が連續して彼を苦しめる。――さうして何時か此努力の爲に斃れなければならない、たつた一人で斃れなければならないといふ怖れを抱くやうになる。さうして氣狂の様に疲れる。是が市蔵の命根に横たはる一大不幸である。

この時、出生のいきさつにせよ、千代子との関係にせよ、市蔵が人生の途上において直面するあらゆる事がらを、その鋭敏すぎる神経で考えつづけ、さらに考えつづけたり、こだわりつづける自分自身に嫌気がさしながらも尚こだわらずにはいられない人間であることを松本は語る。さらにつづけて、

天下にたった一つで好いから、自分の心を奪ひ取るやうな偉いものか、美しいものか、優しいものか、を見出さなければならない。一口に云へば、もつと浮氣にならなければならない。市蔵は始め浮氣を輕蔑して懸つた。今は其浮氣を渇望してゐる。彼は自己の幸福のために何うかして翩々たる輕薄才子になりたいと心から神に念じてゐるのである。輕薄に浮れ得るより外に彼を救ふ途は天下に一つもない事を、彼は、僕が彼に忠告する前に、既に承知してゐた。けれども實行は未だに出來ないで藻掻いてゐる。

ここで、この市蔵の苦悩が「輕薄に浮れ得る」より外に救う途がないことと、市蔵が未だにそれを手に入れること

ができずに苦しんでいることが語られるのであるが、ただ注意しなければならないのは、小説的現在、「停留所」の章において敬太郎の眼に「至つて退嬰主義の男」（「停留所」一）と映る市蔵は、もう自らの出生のいきさつに悩んでいるのではないということである。しかし何かに悩みつづけていることは事実で、では一体市蔵は何に悩むのであろうか。

敬太郎が松本から聞き得た話の中心を成すものは、須永母子はなさぬ仲の親子であるという事実であった。

松本は市蔵から「生涯の敵として貴方を呪ひます」（「松本の話」四）という言葉をつきつけられ、二人が「本當の母子」でないことを告げるのであるが、この松本の明確な解答に対して市蔵は次のように答えている。

「もう止します。もう決して此事に就いて、貴方を煩らはす日は來ないでせう。成程貴方の仰しやる通り僕は僻んだ解釋ばかりしてゐたのです。僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたのです。胸の肉が縮まる程怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却つて安心して氣が樂になりました。もう怖い事も不安な事もありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる樣な氣がします」（「松本の話」六）

この時、市蔵を幼い頃から悩ませつづけていた原因が明らかになり、言うなればその原因が取り除かれ「氣が樂になつた」はずであるのに、「急に心細くなり」「淋しい」というのである。そして前にも増して市蔵は悩みつづけるのだ。

つまり、市蔵の苦悩は、軽薄になるより外に救う途のないものであると同時に、よしんば軽薄を手に入れたとしても悩まずにはおられないといつたそのような苦悩なのであるが、漱石はまさにそういった苦悩をこそ描くのである。

人間は原因があるから苦しむとは限らない。確かに松本にしろ、千代子にしろ、市蔵にしろそれぞれ直接の苦悩の原因となる出来事を抱えているのだが、その原因がすべて取り除かれ、その因果関係が明確になっているにもかかわ

らず、それらを越えて迫ってくるある感情（市蔵はそれを「淋しい」と表現しているのだが）に悩むことを、漱石は描いているのだ。

だとしたら、何によってこの苦悩を解決するのか。「何うかして翩々たる輕薄才子になりたいと心から神に念」ずるという時、この「神」はまさに佐藤泰正氏[1]の述べられるように「苦悩をあかしする」ものとして現われてきているのであるが、この時同時に、市蔵の苦悩が市蔵自身の手によっても、あるいは他の誰の手によっても救済することができないということをあかしてもいるのだ。

「修善寺の大患」を経て、まさにこのとき人間の苦悩のその様相が明らかにされ、では一体この人間の苦悩は何によって救われるのかという永遠の問いと共に、「神」という、人間存在をその魂の深みにおいて救済する一つの可能性としての実在が現われてくるのである。

註

（1）佐藤泰正『文学その内なる神』桜楓社・昭和四十九年三月

なお引用はすべて岩波書店新書版漱石全集からのものである。